

教育研究研修センターだより



通巻 No.279

令和4年9月15日（木）発行

自立に向かって成長するということ

岡山市教育委員会事務局学校教育部

指導課教育支援担当課長 一守和弘

10年ほど前、京都で開催された生徒指導の研究大会に参加したとき、霊長類を研究している方の話を聞く機会がありました。「想像するちから — チンパンジーが教えてくれた人間の心 —」と題して、多くのエピソードや映像で、わかりやすく親しみを感じさせる内容でした。記憶している中から一部を紹介します。

・・・人間の仲間は、ヒトをはじめ、オランウータン、チンパンジー、ゴリラの4属（以降これらを「ヒト科」と呼ぶことにする。）で、それらのDNA配列はほとんど同じである。哺乳類という範囲に広げてもDNA配列はかなり似ていて、ちょっと違うだけで遺伝上は大きく異なる生き物ではなく、仲間だとわかる。

ヒト科以外のほとんどの哺乳類は、生まれて数時間のうちに自分で立ち上がるなどして、母乳を自分で飲むことができる。ヒト科の動物は母親が母乳を飲ませるが、ヒトだけが母親にしがみつくとできない。

でも、ヒトには、大人に自分からしがみつかなかなくても守ってもらうための機能がいくつかある。例えば、成長したヒトは新生児をかわいいと感じるようプログラムされている。このような危害を加えることのないヒトに対して、新生児は微笑したり、夜泣きしたりすることで抱き上げてもらうことができる。楽しくて笑ったり、悲しくて泣いたりしているのとは本質的に異なる。自分でしがみついて親と行動を共にできるチンパンジーの新生児が、このように微笑したり夜泣きをしたりするのを見たことはない。・・・

紀元前にアリストテレスは「人間は社会的動物であり、人間と人間との深いつながりなしには、幸福な人生は考えにくい。」と述べているようですが、これらの話を聞いて、アリストテレスよりずっと以前からヒトは、生まれたときから、複雑に、互いにヒトに依存し合いながら生きていることを再確認できたように感じました。

「自立」の意味は、一般には「他人から支配や援助されずに、自分の力で生きていけること」なのですが、「自立」と「孤立」は異なります。ヒトが、社会的に「自立」するには、その背景や基盤として、互いがどのように、上手に依存し合うことができる関係が構築できているかが重要になると感じています。

「自立に向かって成長する」とは、互いに上手に依存できる人間関係づくりや集団づくりなどを基に、それぞれが豊かな人間性を身に付け、自分を高めながら、共に生きる自分自身を確立していくことです。それは、多様な人たちが共に生きる「共生社会」を形成する一員として成長することであり、教育の目的である「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質」を育成することにつながるものです。

コロナ禍で、授業や学校行事など一部の活動に制限されている間にも、社会ではICTの推進、AIの普及や発展に伴い、ヒトがつながるためのツールは多様になっています。

一人一人を「孤立」させることなく、教職員をはじめ、周囲のヒトによる支援や指導によって、新しいツールも活用しながら、互いに上手に依存し合うことのできる人間関係づくりが推進されることで、子どもたちが「自立に向かって成長する」ことができ、将来、互いを思いやることのできる、優しく平和な社会の形成者となっていくことを願っています。

小学校生活研修講座【授業づくりの応用】

総合的な学習の時間研修講座【授業づくりの応用】

本年度より【授業づくりの応用】は、校種を超えた教科領域等研修として、小学校・中学校合同で研修を実施しました。

小学校生活、総合的な学習の時間の研修講座を合同で開催し、それぞれの教科領域でのねらいや指導方法等の工夫について学ぶとともに、校種を超えて互いに学び合い、小学校から中学校への接続を視野に入れ、連続的かつ発展的な視点をもって指導することができるようになることをねらいとしました。



広島大学大学院 人間社会科学研究科
渡邊 巧 准教授



【個人で単元計画を作成】

小学校低学年から中学校までのつながりを学びました。

次に、授業改善のポイントとして「単元計画の考え方」を学んだ後、個人で単元計画を作り、さらにそれをより良いものにするために、受講者間で協議しました。協議は、小学校生活の受講者、小学校・中学校の総合的な学習の時間の受講者混合のグループで行い、それぞれの立場からの意見を活発に出し合いました。校種、教科領域を超えて学び合い、新たな視点を得ることができました。

まず、講師の渡邊准教授の講義から、「生活科」では、具体的な活動や体験を通して、物事や人、自分と関わり、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成し、「総合的な学習の時間」では、探究的な見方・考え方を働かせ、物事や人、自分を探り、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成するという小



【異校種、他教科の立場から学びを深める】

【受講者の感想】

- 講義の中で、生活科・総合的な学習の時間の授業づくりについて、2つの教科領域に共通する部分を中心に学ぶことができた。グループ協議は小学校・中学校合同で行った。その中で、探究活動のきっかけづくりとして、実際に見る、触る、感じるなどの体験が大切であることに気付くことができた。(小学校)
- 小学校の先生方と話を共有することができ、自分自身の視点が広がった。小学校から中学校にかけて内容を関連させながら、生徒が自ら目的をもって探求活動を進めることが大切だと感じた。単元計画をしっかりと立てて実践していきたい。(中学校)

食育研修講座

「学校園における食育の推進について」



教育研究研修センターでは、「教育課題等研修」として、生徒指導、特別支援教育、情報教育など、各種教育課題の解決に向けての知識技能等の充実、向上をねらいとした研修を実施しています。

今回は、その中から「食育研修講座」を紹介します。

本講座は、食育についての実践紹介・演習を通して、食育の取組に対する理解を深め、指導力の向上を図ることを目的とした研修講座です。小学校・中学校教諭、養護教諭、栄養教諭、幼稚園・認定こども園教職員と様々な校種の先生が受講しました。

まず、「食をめぐる現状と課題」や「学校での食育推進の取組」を踏まえ、食育の意義や学習指導要領での位置付け、学校全体での食育を進めることの必要性について確認しました。給食の献立は、学校給食摂取基準を考慮しながら、旬の食材や地場産物、郷土料理や行事食などを取り入れて作成されており、給食は、『生きた教材』として活用できることを実際の献立の写真等から学びました。

演習では、食育 SAT システムと加速度脈波計（血管年齢測定器）を体験することで、子ども達が主体的に食育に取り組むために機器の活用が有効であることを実感しました。

また、様々な校種や職種の受講者が、各学校園での食育の取組についてグループで協議を行うことで、今後の実践につながるヒントを得ることができました。

～加速度脈波計～

末梢血管血流の状態を評価し、血管推定年齢を測定できます。



～食育 SAT システム～

実物大のフードモデルを選んで、センサーボックスにのせると、その食品のエネルギーや栄養素の量を計算し、モニター画面上で確認できます。



<受講者の感想>

- ・給食のすべての献立には、題材とねらいがあることを、クラスでも伝えて食育の充実につなげていきたい。また、食育 SAT システム等の演習を通して、子ども達が興味関心をもてる機会を増やしていきたいと思った。（中学校・教諭）
- ・給食時間だけでなく、特別活動や小学校生活、体育、家庭科等いろいろな場と関連付けて指導することで、より子ども達の関心に応じて指導することができると感じた。（小学校・教諭）

第2期岡山市教育大綱を踏まえた学校運営の工夫

岡山市立伊島小学校

- 1 はじめに
令和3年度に、第2期岡山市教育大綱が策定された。岡山市がめざす子どもの姿、育む5つの力、4つの指標が明示された。これまで「自立する子ども」を目指して進めてきた教育に変わりはないが、本校の教育の進め方を見直し、より充実させていくためのよい機会ととらえ、教職員と一体となった学校運営に取り組んでいる。

2 取組の実際

(1) 岡山市が目指す教育と学校課題の整理

ア 育む5つの力の理解と共有
教育大綱で示された育む5つの力（「活用力」「表現力」「向上心」「社会性」「人権尊重の精神」）を日々の教育活動で身に付けさせていくために、学校運営計画会議という場を設けて、育む5つの力の理解と共有を図る協議を行った。

イ 本校の強みと弱みの確認

一人一人がワークシートを使って、「地域・環境・保護者」「子ども」「教職員・校内環境」の3点から、本校の強みと弱みを協議した。「主体的な学習の充実」「学力差」「地域の人材の活用」「児童の自治的活動の充実」「不登校・特別支援教育への対応」「自己肯定感の向上」「運動能力の向上」など、次年度以降に取り組むべき課題が浮き彫りになり、整理することができた。

(2) 学校教育目標とアクションプランの設定

岡山市教育大綱の理解、本校の強みと弱み(特徴や課題)の確認をもとに、学校教育目標を「心豊かにたくましく、未来を拓く子どもの育成」に決定し、指導の重点(柱)を「確かな学力」「健やかな心と体」「安心して学校に来られる基盤づくり」の3つに整理することができた。本校が独自に行っているアクションプランについても、3つの指導の重点(柱)に沿って設定した。

(3) 学校組織(校務分掌)の再編と取組の様子

これに合わせ、校務分掌の組織も再編成した。教職員の創意工夫が生かしく、主体的に動きやすいように、校務分掌も指導の重点(柱)に対応した3つのグループから編成し、部会や協議の場をもちやすいようにした。



教職員全員による
第1回学校運営計画会議の様子

3 成果と課題

【成果】

- 教職員が、育む5つの力についての理解を深めることができた。育む5つの力は、新たに取組まなければならないものではなく、これまでも大切にしてきたことであり、見取る場面が思いのほかたくさんあることに気付くことができた。(例えば、「活用力」については「言われなくてもできる力」「学んだことをもとに選ぶ力(判断する力)」「読書をする力」など、具体的な子どもの姿として教職員から出された。)
- 教職員の主体的な創意のある取組が増えてきた。重点的に取り組むべき課題が共有できたために、特別支援教育では中学校区で就学説明会をもつよう計画したり、不登校支援については、組織的なケース会や別室準備などが提案されたりするなど、教職員主導で動き始めている。
- 学校行事の計画や提案の中に、「本校児童の課題」「育む5つの力」「アクションプラン」が明記されるようになり、日々の指導の目的化・共有化が進んだ。(例えば、避難訓練では、それぞれ、課題(指示待ち)、活用力(情報を収集し、自分の判断・行動に活かす)、安心してよりよく成長できる基盤づくり(子どもの安全確保)などが挙げられている。)

【課題】

- 育む5つの力の育成状況、児童の変容や学校課題の解決状況など、学校運営の評価方法が課題である。現在は、岡山市教育に関する総合調査のアンケート項目の見直しや再設定を中心に検討をしているところである。